The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本近代朝鮮語教育史の視点から見た伊藤韓堂（卯三郎）と朝鮮語 : 新聞記者から「算盤をはじく」出版社経営者兼執筆者となった人
Author(s)	植田, 晃次
Citation	言語文化研究. 2019, 45, p. 17-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71630
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本近代朝鮮語教育史の視点から見た 伊藤韓堂（卯三郎）と朝鮮語

―新聞記者から「算盤をはじく」出版社経営者兼執筆者となった人―

植　田　晃　次

일본 근대 한국어 교육사 시점에서 본 이토 간도(우사부로)와 한국어

―신문기자에서 '자금조달에 급급해하는' 출판사 경영자 겸 집필자가 된 사람―

우에다 고오지

논문초록: 이토 간도 (우사부로) 는 1889년에 후쿠오카 (福岡) 에서 태어나 10대 중반에 조선으로 건너가 사립학교에서 한국어를 배웠다고 전해진다. 그후 진남포, 경성에서 신문기자, 신문사 관리직으로 활동하다가 자진 퇴직하고 조선어연구회 주간과 조선사상통신사 사장으로 사업을 전개한 인물이며 1943년에 경성에서 사망하였다.

본 논문은 이토의 인물사와 저작을 통하여 한국어 전문가라는 종래의 평가를 재검토하고 그가 '자금조달에 급급해하는' 출판사 경영자 겸 집필자였다는 새론운 관점을 제시한 연구이다.

キーワード：伊藤韓堂，伊藤卯三郎，朝鮮語研究会

1．はじめに

伊藤韓堂（いとう　かんどう[1]、1889/明治22～1943/昭和18）は本名を伊藤卯三郎と言い、福岡市出身、10代半ばに朝鮮に渡り、私立学校で朝鮮語を学ぶ。その後、朝鮮でジャーナリズム界に身を投じ、いくつかの新聞（朝鮮語版）を記者・編集主任・編集長として渡り歩くも35歳頃に退社するとともに、朝鮮語学習雑誌や学習書の発行を行う朝鮮語研究会（会長：李完応）を設立し主幹として活動した。その傍ら、37歳頃には朝鮮思想通信社を設立して社長を務め、朝鮮語刊行物から記事を選び日本語に翻訳・紹介する日刊『朝鮮思想通信』の発行も行った[2]。この間、自らも朝鮮語学習雑誌に記事を執筆し、李完応（朝鮮語研究会会長）との共著で学習

1）読みは「ラヂオ　新形式の両放送」『国民新報』43、毎日新報社、1940年のルビに依った。

2）1929（昭和4）年11月15日付からは、朝鮮通信社、『朝鮮通信』と改名している。なお、同通信の1926～1933年分（京城帝国大学の蔵書印が見られる）の影印本が韓国で発行されているが（景印文化社、1989年）、影印の経緯が不明であるため、本論文では資料として用いない。

書も刊行した。30歳頃と晩年の容貌を示す写真が残っている[3)]。

伊藤については、主に朝鮮語研究会とその活動・出版物に関する研究の中で簡単に触れられてきた。例えば、参考文献に挙げた植田・オ＝セネ・呉大煥・山田・吉本などによる一連のものがある[4)]。また、山田（2004）でも朝鮮語奨励政策を論ずる中で朝鮮語研究会の雑誌を扱っている。この他、鄭晋錫（2005: 104, 153）のように、メディア史研究の中でも言及されることがあった[5)]。しかし、これらはおおむね概略や森川・越智（1935: 1176–1177）に基づいたと見られる簡略な記述にとどまる。先行研究、主に韓国での研究は、3 章で述べるように、伊藤を「朝鮮語教育界の権威者」・「朝鮮語専門家」と位置付けている。さらに、チョン＝ヂョンヒョン（2018: 145, 150）には伊藤卯三郎（1927）を検討する中で伊藤について朝鮮語教育史の分野での先行研究と異なる視点からの言及がある。ここでチョンは、「自身が定着した植民地朝鮮という場所を自己のアイデンティティの土台と見なしていた［…］」伊藤は「植民地を旅行客のように凝視する植民本国の日本人や統治の対象としてのみ把握していた総督府官僚とは異なる立場にあ」り、「［…］死ぬまで朝鮮人の声を日本側に伝えることを自身の召命と自任していた人物［…］」と指摘している。

本論文では、日本近代朝鮮語教育史の視点から、人物史主義と原物主義（植田 2012: 204）に基づき、人物史と著作を検討することによって、伊藤と朝鮮語との関わりについて明らかにする。このような視点・方法の研究は存在しない。具体的には、まず伊藤の人物史を明らかにし、彼自身による朝鮮語雑誌の記事や学習書の書誌を整理した上で、伊藤と朝鮮語の関わりを検討する。そして、伊藤自身が自らに対して用いた「算盤をはじく男」という表現をキーワードとし、「人生を切り拓く着脱可能なアイテム」[6)]という概念に基づいて、出版社経営者兼執筆者という新たな人物像を示し、伊藤と朝鮮語との関わりを日本近代朝鮮語教育史の文脈の中で位置付けることを試みる。

2．伊藤韓堂（卯三郎）の人物史

2.1　誕生から渡朝、新聞記者からジャーナリズム界の幹部・管理職へ

前述のように、伊藤の人物史については、伊藤と同時代に生きた森川・越智（1935: 1176–1177）が概要を示している。先行研究は、おおむねこれに基づいたと見られる記述にとどまっている。

3）「国境横断旅行」『毎日申報』1919.8.15(1)・17(1)・18(1)＊、「伊藤韓堂氏」『毎日申報』1943.4.18(2)＊　以下、引用文献を含め、朝鮮語文献は日本語訳で示し＊を付す。また、引用にあたって、旧字は新字で表記する。新聞の掲載日の直後の（　）内の数字は面を表す。

4）呉大煥（2009a）の問題点は植田（2010）で言及した。植田（2010）ではさらに、ホ＝ヂェヨン（2004）や同氏による一連の影印本の杜撰さについて指摘したが、吉本（2012）にはそれをリライトした箇所が散見される。また、イ＝ユンヂ（2018）は基本的に一部の先行研究を簡略にまとめたものである。

5）金泰賢（2011: 43）などにも鄭晋錫（2005）に基づいた記述がある。

6）植田（2017: 23）

ただ、没年を新たに示したものがある。以下、本研究もこれを基にしつつも、当時の新聞記事等を主たる資料とし、さらに詳細な人物史を明らかにする。

伊藤韓堂（卯三郎）は1889（明治22）年生まれ[7]、福岡市薬院出口を原籍とする[8]。韓堂は号であろう[9]。1903年（明治36）もしくは1905（明治38）年5月、朝鮮に渡り[10]、鎮南浦私立保英学校で朝鮮語を学んだという[11]。しかし、「保英学校」についての資料は見当たらず、伊藤がどのような形でどの程度、朝鮮語を学んだかは不明である。

1910（明治43）年4月、鎮南浦新聞社に入社し、諺文附録編輯主任となるが、1912（大正1）年、「一身上ノ事情」によって退社する[12]。1915（大正4）年2月、朝鮮新聞社に入社し、諺文版編集主任、1919（大正8）年3月、京城日報社に転じ、1921（大正10）年4月、毎日申報社に入社し、編輯長を務める[13]。

朝鮮新聞在職中には、在京城新聞通信雑誌少壮記者の親睦を図る京城記者懇話会（1918/大正7年2月11日発足）の入会希望申込先のひとりとなる[14]。

京城日報在職時には、毎日申報に特派員として朝鮮語でルポルタージュ「国境横断旅行」（全95回）を5カ月に渡り連載する[15]。この取材は、京城を出発し、元山から海路で城津・清津を経て雄基に上陸、豆満江・鴨緑江沿岸地域を琿春から新義州まで取材した壮大な企画であり[16]、1919（大正8）年8月21日の出発から約3ヶ月、同年11月11日の新義州到着で終了、14日に京城に帰還した[17]。1面トップで重ねて予告されていることからも少壮記者・伊藤に任された目玉企

7）高橋（1939; 1939[2]: 9）。なお、訃報の「伊藤韓堂氏」『毎日申報』1943.4.18(3)＊、「伊藤韓堂氏」」『京城日報』1943.4.18（2）ではともに享年は55歳とあるが、数え年齢かと思われる。

8）森川・越智（1935: 1176−1177）。高橋（1939; 1939[2]: 9）でも福岡県とある。また、「故伊藤氏遺骨福岡へ」『毎日申報』1943.7.21朝刊(3)＊でも「故郷の福岡（福岡市上出口町）」とある。なお、シン＝ヘス（2014: 18）では、なにも根拠を示さず「横浜出身」としている。本論文では同時代の3つの資料で一致し、原籍ともある福岡が出身地であると判断した。

9）シン＝ヘス（2014: 18）では、朝鮮・朝鮮語に対する愛着から「韓堂」と改名したと主張しているが、注8で指摘した「横浜出身」説と同様に、「愛着」や「改名」について、なにも根拠を示していない。中村健太郎の三笑のように号と見るのがより妥当であろう。

10）「伊藤韓堂氏」『毎日申報』1943.4.18(3)＊では明治36年、森川・越智（1935: 1176）では明治38年5月とある。管見の限りでは、朝鮮に渡った経緯や理由を示す史資料はない。

11）森川・越智（1935: 1176）。前田（1926: 101−140）による限り、同校については存在が確認できない。前田（1926: 118−119）では、鎮南浦小学校の始まりについて、1897（明治30）年の開港後、日本人の漸増に伴い、1898（明治31）年1月、居留民総代松浦常太郎が総代事務員浜谷重太郎に「事務所の一隅に於て職務の余暇児童を集め読書、算術、習字」を教えさせ、1906（明治39）年8月、居留民団立小学校となったとされる。このような学校教育整備前の何らかの学校の可能性も考えられる。また、稲葉（1997: 374−376）によれば、保東学校（前身は得英学校）があったが、日語学校である。

12）森川・越智（1935: 1176−1177）

13）森川・越智（1935: 1177）

14）「記者懇話会成」『毎日申報』1918.2.9(2)＊、「懇話会発会式」『毎日申報』1918.2.10(2)＊

15）「国境横断旅行」『毎日申報』1919.9.11(1)〜1920.2.15(1)＊に連載。連載終了後、「国境横断旅行を了えて」（全12回）と題した連載も行っている（1920.12.7・9−11・13・14・16−18・20・21・25掲載面はすべて(2)＊）。京城日報（日本語紙）と毎日申報（朝鮮語紙）は姉妹紙である。

16）第1回（1919.9.11）は会寧から豆満江を渡るところに始まり、第95回（1920.2.15）は慈城邑到着までで終わっている。なお、第91回（1920.2.11）では、『新案韓語栞』とそれを使い回しして編纂した『新案独学鮮語自在』の著者で当時、中江鎮公立普通学校長であった笹山章についても言及されている。笹山については植田（2018）参照。

17）「伊藤特派員帰期［ママ］『毎日申報』1919.11.12(2)＊、「伊藤特派員帰社」『毎日申報』1919.11.16(2)＊

画であったことがわかる[18]。この取材では、出発から程ない28日早朝、ともに恵山鎮に向かっていた猪俣武雄（久原銅山庶務係）が「些細な感情から筏夫に殴られ」死亡するという経験もしている[19]。「国境横断旅行」連載開始と並行して、「間島産業と鮮人」（全７回）という連載も掲載されている[20]。

1920（大正９）年には、齋藤総督の東京から「帰城」の迎接に出向き、南沿岸各地巡視の同行者のひとりとなってもいる[21]。

1921（大正10）年３月には、毎日申報編輯局長理事・方台栄の退社に伴い、京城日報編輯局長・中村健太郎が兼務することになったが、中村の本務煩多により伊藤が代理視務することとなった[22]。このように伊藤は記者から新聞社の幹部・管理職となった。その後、中村が朝鮮総督府に転職する際の毎日申報退社（1922/ 大正11年８月31日）の送別会（同年９月１日）では伊藤が送別の辞を述べた[23]。

このように新聞記者、新聞社幹部・管理職として活躍していたにも拘わらず、伊藤は1924（大正13）年７月退社し、「［…］朝鮮統治ハ内鮮両民族ノ隔意ナキ提携ニアリ而シテ其ノ提携ニ必要ナルハ朝鮮語ノ研究ニアリ」[24]として朝鮮語の普及・奨励に乗り出すことになる[25]。退社に際し、同僚の勿齋学人が送別の辞を送っている[26]。

なお、伊藤は退社の約１年前に、朝鮮語による月刊女性雑誌『婦人界』を創刊している[27]。同誌は第１巻第２号しか見いだせない[28]。奥付に依れば、1923（大正12）年３月15日発行、発行兼編集人は伊藤卯三郎（京城府黄金町一丁目二九二番地）、印刷所は東亜印刷所（京城府西大門町二丁目一三九番地）、印刷人は李義順（京城府杏村洞一六一番地）、発行所は婦人界社（京城西大門外阿峴里）、発売所は文昌社（京城西大門外阿峴里九〇）、定価20銭である。ここでは、朝鮮語学習雑誌・学習書を刊行する前に伊藤が分野は異なるもののすでに雑誌の編集・発行を行っ

18）『毎日申報』1919.8.15(1)・17(1)・18(1)＊

19）「猪俣氏……筏夫に殴られ死亡、伊藤氏は無事」『毎日申報』1919.9.30(3)＊

20）『毎日申報』1919.9.10・11・13・15・16・18・20掲載面はすべて（2)＊

21）洪木春「南征見聞記（一）第一信」『毎日申報』1920.4.11(1)＊

22）「本社幹部変更」『毎日申報』1921.3.10(2)＊　なお、「毎日申報社員異動」『東亜日報』1921.3.7(2)＊では、「編輯局長」ではなく「編輯部長」となっている。なお、鶏龍川の遊覧への出発についての「人事消息」『毎日申報』1922.11.8(2)＊では「編輯部長」とある。

23）「惜別する主客の一盃の酒」『毎日申報』1922.9.3(3)＊

24）当時の日本語の「研究」という語は、「ミガキ、キハムルコト。事ノ理ヲ、善ク深ク、考ヘ分クルコト。研鑽。」（大槻文彦『大言海』2、冨山房、1933年、191頁）というように現代日本語より幅広い意味で用いられていたことには留意する必要がある。

25）森川・越智（1935: 1177）

26）「伊藤韓堂兄を送る」『毎日申報』1913.6.23(1)＊　ここでは「一時は槿域に背き遠く扶桑に□するも再び旆を還し駕を退することになるに対しては何よりも不幸の幸です」とあり、退職前に一時内地に戻っていたことに言及している。□は判読不能の文字。

27）チョン＝ヂョンヒョン（2018: 147）

28）『雅丹文庫未公開資料叢書2014_19』ソミョン出版社、2014年＊に影印・収録されている。

ていたことのみ指摘しておく[29]。

2.2　出版社経営者兼執筆者への転身（1）：朝鮮語普及・奨励業界

毎日申報を退社して以降、伊藤は朝鮮語研究会[30]を組織し、朝鮮語の普及・奨励に乗り出す。朝鮮語研究会がいつ発足したのかは不明であるが、『朝鮮文朝鮮語講義録』が1924（大正13）年9月から発行されており、事務所移転の新聞記事に「伊藤韓堂氏（朝鮮語研究会主幹）」とあることから、少なくともこれ以前に発足して事務所を構えていたことがわかる[31]。

朝鮮語研究会の活動の第1は朝鮮語学習雑誌の発行である。具体的には、1924（大正13）年9月から1933（昭和8）年11月にかけて『朝鮮文朝鮮語講義録』（第1回～第3回）[32]・『月刊雑誌朝鮮語』・『中等朝鮮語講座』の3誌を発行した。また、朝鮮語奨励政策や時流を背景に『講義録』の売れ残りをバラバラにしたものを綴じ直して製本しクロース装・金文字という付加価値を付けた合本としたり、雑誌連載記事を基に学習書として編集し直したりもして販売した。この例のように、朝鮮語研究会の少なからぬ出版物は、（タイトルを変えることはあるが）過去の出版物をそのままの内容で、あるいはその内容を流用・再編集して新たな出版物として刊行するという「使い回し」によるものであった[33]。雑誌連載記事と書名が一致する『朝鮮語発音及文法』

29）シン＝ヘス（2014: 18）では、「朝鮮文講習、漢文講習」が掲載されているとあるが、影印を見る限り、前者は見当たらない。

30）同会はホ＝ヂェヨン（2004: 2–3）が「京城府 朝鮮語研究会」（さらには「京城 朝鮮語研究会」）と呼び始めたところから、その呼び方が無批判にチェ＝ギョンボン・チェ＝ウンホァンなどにも継承されていることは植田（2010: 26–27）で夙に指摘した。それにも拘らず、この呼び名はオ＝セネ（2012: 72）などによってさらに拡散されている。オ氏は「この団体の名称を京城 朝鮮語研究会と呼ぶべきか、朝鮮語研究会と呼ぶべきかは未だ学界全般に統一された意見が現れていない。」としたうえで、「本稿では現ハングル学会の前身の朝鮮語研究会と区別するためにホ＝ヂェヨン（2007）の意見に従い京城 朝鮮語研究会と呼ぼうと思う。」と主張しているが、植田（2010）の論拠を正確に理解し得ていないようである。オ＝セネ（2012: 71）で大阪屋号書店を대판 옥호서점と分かち書きしていることもこのことを裏付ける。また、呉大煥（2010: 108）では「［…］この団体の公式名称は『朝鮮語研究会』であるが、周時経の『朝鮮語研究会』と区別するために、この団体の書誌記録に登場していた『京城 朝鮮語研究会』を公式名称として使おうと思う。」とこの時点では提案している。この主張についてはまず、呉大煥がここでいう「書誌記録」が何を指すかは不明だが、本論文の執筆者の実見によれば、実際の刊行物でこの名称は用いられていない。なお、標題紙や表紙には「京城 朝鮮語研究会」とある場合がある。しかしながら、この京城は植田（2010）が指摘したように発行所の所在地を表すにすぎない。例えば、『朝鮮語試験問題並訳文集』（朝鮮語研究会 編纂、1930年6月8日発行）の標題紙や表紙に「京^{V1}城^{V2}朝^{V3}鮮^{V4}語^{V5}研^{V6}究^{V7}会^{V8}発^{V9}行」（^{V}はスペースを表す）とあるが、標題紙では、スペース^{V2}と^{V8}が3㎜、その他が2㎜であり、さらに京城の活字が少し小さい。また、表紙でもこれに準じたレイアウトになっている。京城が所在地を示すことは、朝鮮語学習書に限らず当時の出版物の原物に触れていれば、ホ＝ヂェヨン（2004）をはじめとする論文での呼称の問題は起こりようがない。ここでの京城は、例えば『新新朝鮮語会話』（山本正誠、大阪屋号書店、1924年4月15日発行初版）の標題紙で、「東京　大阪屋号書店」とある「東京」と同様である。なお、呉大煥（2011b: 70）では、植田（2010）に言及することなく、京城府 朝鮮語研究会・京城 朝鮮語研究会ともに「［…］正式名称ではなく、便宜的に付けられた名称にすぎない。『京城府 朝鮮語研究会』という名称は実際に用いられたことが全くなく［…］」と呉大煥（2010）での提案の根拠を修正し、自論の辻褄を合わせている。以上のように、2種類の誤読の相乗効果により、誤った名称が広がっている。

31）「鮮語研究移転」『朝鮮新聞』1924.11.2（2）に「朝鮮語研究会は今回府内黄金町三丁目三十番地同会主幹伊藤韓堂氏宅に事務所を移転した」とある。また、「人事消息」『毎日申報』1924.11.2（2）＊にも同様の記事がある。

32）吉本（2012: 77–79）は、ホ＝ヂェヨンの影印本を資料として、『朝鮮文朝鮮語講義録』は「［…］第四回以降も実施されたと考えられる。」と述べている。しかしながら、朝鮮語研究会の学習雑誌、とりわけ『朝鮮文朝鮮語講義録』の「合本」の刊行形態や朝鮮語研究会の性格（植田 2009, 2010）、商業出版物としての朝鮮語学習書の性格（植田2014）等を踏まえ、さらに慎重な検討を要する。このような重要な事柄の断定には当該頁と他の頁の紙質の違いの有無や当該箇所に貼付などによる修正がないかなどを原物で確認すべきであると本論文の執筆者は考える。

33）朝鮮語研究会は『朝鮮文朝鮮語講義録』の第1回の段階から資金繰りに苦労し、「「自転車操業」で出版物の刊行・販売を中心とした活動を行う民間団体」であった（植田 2010: 38–39）。同会の新たな学習書は、管見の限り1938（昭和13）年3月31日発行の『朝鮮語通信会話』（朝鮮語研究会 編纂）（独立記念館蔵 3–008626–000、デジタル）を最後と

（李完応、1926/ 大正15年4月3日）のような雑誌連載記事を使い回しして単行本化したものがその代表である。その他、『月刊雑誌朝鮮語』に掲載した附録「日鮮単語対訳集」に『朝鮮文朝鮮語講義録』に掲載した「常用漢字音別表」を「和鮮漢字音表」と改題したものと、「朝鮮語第三種試験問題並訳文集」を合わせて単行本に編集した『一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書　附録』（伊藤韓堂・李完応 共著、1928年1月1日発行）がある。さらにその「日鮮単語対訳集」の部分のみを使い回しして単行本化した『日鮮単語対訳集』（朝鮮語研究会 編、1929年2月7日発行）[34]もある。さらには、これに『一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書』の「和鮮漢字音表」を「内鮮漢字音表」と再々改題して加えて使い回しして編集した『内鮮新辞典』（朝鮮語研究会 編、奥付を欠き刊行年月日不詳）[35]があるといった激しい使い回しの跡が見られる。また、『一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書』のような、いかにもたやすく朝鮮語が身につきそうな期待を学習者に抱かせる、販売拡大・促進のための書名の付け方などにも編集上の工夫が感じられる。

なお、これらの執筆者陣には、伊藤の人脈を大いに生かし、総督府やジャーナリズム界から幅広い人材を起用している。

植田（2010: 42）は同研究会の性格を「［…］先行研究で下された，総督府の深い関与の下で，朝鮮語学習の奨励・朝鮮語教育の推進を行った（半）官製団体であるという従来の評価と異なり，朝鮮語奨励試験を利用して出版物の販売促進・出版物の販路拡大を試みた民間団体」と断じた。そのような性格から、これらの朝鮮語研究会の朝鮮語学習雑誌・学習書には上述のような発行形態や状況、使い回しや書名の付け方といった編集上の工夫とともに、いっそう付加価値を高めるための様々な販売拡大・促進のための努力・工夫が凝らされている。例えば、『月刊雑誌朝鮮語』には、朝鮮語奨励試験委員長の「尚今回の合格者中には、朝鮮語研究会発行の朝鮮文朝鮮語講義録に依り学習したる者が相当あつた様に思はれる。講義録の内容如何に付いては敢て言及しないが、将来に於ける受験者諸君の参考として特に附記して置く。」というような総督府を後ろ盾にした事実上の強力な宣伝となる文章が掲載されている[36]。また、例えば『朝鮮語第三種受験者必携』（李完応・伊藤韓堂 共著、1927/ 昭和2年5月12日）[37]のように、学習書の校閲に藤波義貫（総督府通訳官）・田中徳太郎（同左）・玄櫶（総督府視学官）といった朝鮮語試験委員をあて、権威づけするという工夫も見られる。さらに『朝鮮文朝鮮語講義録』第1

し、その後は14年に渡り使い回しした『一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書』（1928年1月1日初版）と9年に渡り使い回しした『普通学校朝鮮語読本　国語訳解』（1933年6月15日初版）の重版以外の学習書の刊行は確認できない。本論文の執筆者の実見調査の限りでは、『一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇』（16版、1942年4月18日発行、個人蔵）、『普通学校朝鮮語読本巻一国語訳解』・『普通学校朝鮮語読本巻三国語訳解』（ともに2版、1942年12月18日発行、大阪大学蔵№16200534267・16200534275）が原物を確認できた最後のものである。このことから、1930年代末以降の出版活動は先細りになっていたと考えられる。

34）ソウル大学蔵（№101 0783139 7）

35）ソウル大学蔵（J/030.31/C451n）。OPACには資料番号があるが、原物には見られない。

36）藤原（1926）

37）韓国・国立中央図書館蔵（317-53）

回[38]には、「雑誌朝鮮語の発刊を広告した八月十四日の翌朝齋藤総督閣下から斯の如き直筆の註文状が到着した。」として、その注文状・名刺・封筒（裏表とも）の写真までが麗々しく掲載されてもいる。

さらに、上述の朝鮮語学習雑誌・学習書の発行形態や状況、編集上の工夫、販売拡大・促進のための努力・工夫とともに、伊藤の以下のような動向を合わせ見れば、編集・経営における彼の出版社経営者兼執筆者としての手腕が浮かび上がる。例えば、伊藤から齋藤実総督に宛てた書簡（1926/大正15年12月15日付）[39]では「拝啓［…］黄海道庁にては一般職員に対し今回左記方法に依り徹底的に朝鮮語御奨励相成候由に付ご参考迄に御報知申上候也敬具」とあり、黄海道知事官房主筆から関係機関長への文書「（秘乙第二五六号）朝鮮語奨励ニ関スル件」（1926/大正15年10月5日付）が転記されている。ここには、「［…］自修書トシテ朝鮮語研究会発行ニ係ル講義録其ノ内容整ヒ居ルノミナラズ価亦低廉ナルヲ以テ適当ト認ム」とあると同時に、道で注文を取り纏めた場合、特価より値引きされるよう交渉済であることが示されている。このように、総督や道庁に食い込むとともにその権威を利用したり、値引きを行ったりといった販売拡大・促進のための努力・工夫もなされている。

伊藤は朝鮮語研究会主幹、朝鮮語学習雑誌・学習書の編輯兼発行人[40]として上述のような手腕を発揮し、これらの出版物の編集・発行を統括する出版社経営者兼執筆者であったとみて差し障りないであろう。

2.3　出版社経営者兼執筆者への転身（2）：ジャーナリズム界

毎日申報を退社後、朝鮮語研究会が『朝鮮文朝鮮語講義録』の第1回を終了し、それを受けて創刊した『月刊雑誌朝鮮語』の7号を発行する頃、伊藤は朝鮮思想通信社をも組織し、『朝鮮思想通信』を発行する。申込書の葉書が付された伊藤名義の「「朝鮮思想通信」発行のお知らせ」[41]によれば、同社は1926（大正15）年4月23日付の新聞紙規則によって認可され、同通信は5月15日に第1号が発行された[42]。発行に際し、時代日報など京城の関係各所に伊藤が朝鮮思想通信社長として挨拶に赴いている[43]。「「朝鮮思想通信」発行のお知らせ」によれば、その内容[44]は「日々発行せらるる朝鮮文の諸新聞・雑誌・著述等の内より朝鮮研究に必要なる主要部分を

38）ソウル大学蔵（Y36/2/1(1)）所収。保存の形態から号数は確定できないが実見調査によれば第1回のいずれかの号に掲載されたものである。

39）日本・国会図書館蔵「伊藤卯三郎書翰」（齋藤實関連文書　書翰の部1　三五六）

40）著作兼発行人となっている場合もある。

41）学習院大学東洋文化研究所友邦文庫蔵（M4-12-3-(32)）

42）「朝鮮思想通信」『朝鮮新聞』1926.4.27朝刊（3）では認可は4月26日附とされている。また、「朝鮮思想通信発行」『朝鮮新聞』1926.5.7夕刊（1）でも創刊が報じられている。なお、「朝鮮通信廃刊」『毎日申報』1943.4.28(3)＊では第1号の発行日は4月23日となっている。

43）「人事」『時代日報』1926.5.6(1)

44）内容については、「朝鮮思想通信」『朝鮮新聞』1926.4.27朝刊（3）、「朝鮮思想通信発行」朝鮮新聞1926.5.7夕刊（1）、「朝鮮思想通信発行認可」『毎日申報』1926.4.28(1)＊でも簡潔に紹介されている。

飜訳し、謄写印刷の上、即夜発行するもの」である[45]。続けてその目的を、「［…］朝鮮文を読み得ざる方々に、これに依つて朝鮮同胞の真の叫びや、諸問題に対する主張や態度を見て戴きたいと思う［…］」と説明している。さらに、朝鮮語による「参考資料」が「内地人有識者」に注意されずに消えていっていることに対し、「その議論は社会的環境や、民族的感情を異にする人達のものであるから、悉くが首肯に値するといふのではなく、寧ろ誤解や曲解に出でたのではないかと思はるるものがないでもないが、内地人たるものは、その是非曲直を問はず、一応は耳を傾けて聞いてみるだけの雅量はあつて欲しいと思ひます。」と主張するとともに、朝鮮語紙による朝鮮人への影響に注意を要するとしている。そして、「［…］本通信を通じて、この朝鮮同胞の叫びを聴き、環境の相違から来る特種の「気分」や「感情」を幾分でも酌むで戴かむことを御願ひするものであります。」と結んでいる。なお、「「朝鮮思想通信」発行のお知らせ」では、同通信は一カ月単位の会員制とされている。

また、毎日申報の記事には「［…］ただ内地人のみならず朝鮮人にも思想上進路の指針を定め一面で自己を省察するのに一大好資料になるだろう」という期待が示されている[46]。

新聞報道によって確認できる限りだが、伊藤は毎日申報を退社し朝鮮語研究会を組織して後も、以下のようなジャーナリズム界での、もしくはジャーナリスト人脈につながる活動も行っていた。

1926（大正15）年5月30～31日　鮮満月刊新聞大会に李完応とともに出席[47]

1926（大正15）年5月31日　朝鮮新聞政治部長・久松前平の母の告別式で友人総代を務める[48]

1929（昭和4）年4月26日　朝鮮新聞物故社員追悼会に参列する[49]

1929（昭和4）年8月19日　京城新聞懇話会への伊藤の加入が承認される[50]

1931（昭和6）年9月3日　京城日報庶務部長・久松前平の父の告別式で友人総代を務める[51]

1937（昭和12）年10月26日　蘇峰会朝鮮支部発足に際して、評議員に選任される[52]

このことから、朝鮮語研究会主幹として活動する一方、朝鮮（思想）通信社社長というジャーナリズム界における出版社経営者兼執筆者としての社会的な立ち位置も維持していたことがわかる。

なお、1930（昭和5）年には父を亡くした際に帰郷し、1月15日に京城に戻っている[53]。

45）1926（大正15）年10月1日からは活版印刷となった。「朝鮮思想通信不日活版印刷」『毎日申報』1926.9.24(1)＊

46）「朝鮮思想通信発行認可」『毎日申報』1926.4.28(1)＊

47）「鮮満記者団を迎ふ朝博」『朝鮮新聞』1926.5.30朝刊（1）

48）「久松部長母堂」・「〔訃報〕母ツナ儀［…］」ともに『朝鮮新聞』1926.6.1夕刊（2）

49）「紙齢一万号に達して本社物故社員追悼会」『朝鮮新聞』1929.4.27朝刊（5）

50）「新聞懇話例会日本新聞協会大会提案事項附議」『朝鮮新聞』1929.8.21夕刊（1）、「新聞懇話会例会」『毎日申報』1929.8.21(1)＊

51）「久松部長厳父」・「〔訃報〕父廣治儀［…］」ともに『朝鮮新聞』1931.9.3朝刊（5）

52）「『蘇峰会』朝鮮支部誕生」『毎日申報』1937.10.27朝刊（1）＊

53）「人事」『毎日申報』1930.1.17(1)＊　なお、父の死去は1929（昭和4）年末の可能性もある。

1931（昭和6）年5月には朝鮮語研究会とともに朝鮮通信社が「業務の拡張に伴ひ事務所狭隘につき市内太平通一丁目卅九番地の旧朝日乃旅館跡に移転」した[54]。ここからは、両者が一体のものとして運営されていたこと、当時「業務の拡張」があったことが見て取れる。「吉村直亮氏専務理事として入社し社業に一段の拡張を加ふることゝなつた」という報道[55]からも何らかの業務拡張を行おうとしていたことが裏付けられよう。吉村は、九州日報朝鮮支局新設（1929/昭和4年9月）にあたり、朝鮮交通協会から京城支局長として迎えられたジャーナリストであり[56]、伊藤のふたつの活動のうち朝鮮通信社のテコ入れのための人物であったのだろう。

なお、朝鮮思想通信社内には露西亜通信京城支局も置かれており、伊藤も同通信の『新露西亜観』の執筆者に名を連ね、「極東を中心としての日露貿易」などを残している[57]。また、1936（昭和11）年には日華通信社長という肩書も見られるが、詳細は不明である[58]。

ここでも伊藤は、朝鮮（思想）通信社社長として上述のように手腕を発揮し、ジャーナリズム界に食い込み、同社の組織・運営と日刊『朝鮮（思想）通信』の編集・発行を統括する出版社経営者兼執筆者であったとみて差し障りないであろう。

2.4　晩年から死去、その後の朝鮮語研究会と朝鮮通信社

このように、朝鮮語研究会主幹・朝鮮通信社社長として活動する中、1940（昭和15）年2月1日19時30分～20時30分に、京城中央放送局第2放送（朝鮮語放送）で「朝鮮の今昔を語る」と題した「内地人」のみの朝鮮語による座談会が放送予定で朝鮮総督府官吏の田中徳太郎・西村真太郎（ともに通訳官）・中村健太郎（嘱託）といった面々と4人で伊藤が出演するという記事が見られる[59]。また、伊藤は朝鮮総督府始政25周年と30周年には新聞関係者枠で記念表彰者に選ばれている[60]。

1943（昭和18）年の正月初めから食道癌で療養中のところ、3月4日に京城府瑞麟町の金晟鎮医院に入院するも、4月17日午前9時55分（10時とも）、自宅（京城府太平通1–29）で死去、7月20日に遺族が遺骨を福岡に移し、24日に郷里の母宅で本葬が営まれたようだ[61]。10代半ばで朝鮮に渡った伊藤は、人生の大半を朝鮮で暮らし、妻と2人の男子、郷里・福岡に八旬を越える母を残して京城で亡くなった。享年は55歳とあるが、前述のとおり数え年齢と思われる。

54）「朝鮮通信社移転」『朝鮮新聞』1931.5.17夕刊（1）

55）「朝鮮通社［ママ］拡張　吉村氏入社」『朝鮮新聞』1931.8.14夕刊（1）

56）「九日支局新設／朝鮮に活躍」・「人事」ともに『朝鮮新報』1929.9.22夕刊（1）

57）巻末広告『月刊雑誌朝鮮語』20、朝鮮語研究会、1927年5月10日発行（大阪大学蔵№16200377501）、植田（2010: 29）

58）「人事」『毎日申報』1936.9.30夕刊（1）＊　同社は1921（大正10）年2月10日創立、「本月から府支［ママ］政治経済思想問題を主とする月刊通信法を発刊する」通信社であることが東京発で報じられている（「日華通信の創刊」『毎日申報』1921.2.25（2）＊）ので東京の通信社と思われる。

59）「ラヂオ　新形式の両放送」『国民新報』1940.1.21（27）、

60）森川・越智（1935: 1176–1177）、「栄誉の表彰者九千六百六十七名」『毎日申報』1940.10.2夕刊（2）＊

61）本段落は「人事」『毎日申報』1943.3.6朝刊（1）＊、「伊藤韓堂氏」『毎日申報』1943.4.18夕刊（2）＊、「伊藤韓堂氏」『京城日報』1943.4.18（2）、「故伊藤氏遺骨帰郷」『京城日報』1943.7.21朝刊（3）＊による。

以下、伊藤の死後の朝鮮語研究会と朝鮮通信社について述べる。

朝鮮語研究会については、すでに豊野実（崔常寿）によって引き継がれた団体が「直接的には朝鮮語とは関係のない活動を細々と行っていた」とは判明しているが[62]、その後、明らかになったさらに詳しい経緯は次の通りである。

伊藤の死後約ひと月後には、「［…］朝鮮通信は既に報じた通り廃刊したが、『朝鮮通信』を主宰していた故伊藤韓堂氏の生前の意を受け、朝鮮語研究会だけはそのまま存続することになったという。」[63]と報じられた。そして、伊藤の死後1年後の翌年4月には、朝鮮語研究会の「再出発」が次のように報じられる[64]。

> 府内太平通一丁目二十九番地にある朝鮮語研究会　同会創設は［ママ］伊藤韓堂氏の逝去により長きに渡って沈黙を守ってきていたがこの度豊野（豊野実＝旧名崔常寿）氏を迎え内部の陣容を強化すると同時に国語普及叢書と満支語叢書発刊に注力せんとするのであるが、同研究会の新たな出発に一般は期待する

しかし、発行が確認できる書籍は、『科学小話』（崔常寿、1944/昭和19年7月25日）・『女の学校』（豊野実、1944/昭和19年9月15日）の2冊であり[65]、報じられたいずれの叢書でもない。

朝鮮通信社は、伊藤の死去10日後の4月27日付を最後に伊藤の「生前の意志」によって早くも自ら廃刊した[66]。しかしながら、1944年9月20日付で朝鮮通信社から朝鮮総督府図書館に寄贈・受入された図書があることから、朝鮮語研究会同様に何らかの形で存続していた可能性があり[67]、今後解明すべき課題である。いずれにせよ、伊藤の「生前の意思」は、朝鮮通信については廃刊、朝鮮語研究会については継続というものであった。

新聞社退社後の伊藤の軌跡を見るに、2つの組織では同じような事業を行ったことがわかる。すなわち、まず、朝鮮語研究会では前述のような販売拡大・促進のための努力・工夫を施しつつ『朝鮮文朝鮮語講義録』を刊行した後、その残り物に付加価値を付けた合本という形で販売し[68]、さらには『月刊雑誌朝鮮語』の開始の約半年後から『朝鮮語発音及文法』（李完応、1926/大正15年4月3日）を嚆矢に、雑誌記事という「遺産」の使い回しを含めて学習書を刊行している。他方、朝鮮思想通信社でも朝鮮語紙の記事を翻訳抄録した日刊紙を刊行するのみではなく、「△本通信は毎月初、前月分の目次表を添付するが故に、これを製本すれば一冊二百数十頁

62）植田（2010: 40–42）

63）「朝鮮語研究会今後存続することに決定」『毎日申報』1943.5.20(3)＊

64）「朝鮮語研究会再出発」『毎日申報』1944.4.17(2)＊

65）植田（2010: 35）

66）「朝鮮通信廃刊」『毎日申報』1943.4.28(3)＊

67）植田（2010: 41）。なお、左記で「豊野実（1994）」とあるが、下線部は「1944」の誤記である。

68）植田（2017: 18）

の書籍となり、他日の好参考資料たるべし」（『朝鮮文朝鮮語講義録』掲載広告[69]）という宣伝文句のように、翌月に配布される目次表とともにひと月分を製本して書籍のようにするというまさに講義録方式のアイデアを採っている。

これらの様々なアイデアが盛り込まれ、販売拡大・促進のための努力・工夫が施された出版物や伊藤の動向を見ると、これらを朝鮮語研究会主幹・編輯兼発行人、朝鮮（思想）通信社社長として統括する出版社経営者兼執筆者という伊藤の姿が浮かび上がる[70]。同時に、「内鮮両民族ノ隔意ナキ提携」の実現を目指し、内地人には朝鮮語の普及・奨励のための朝鮮語研究会を作るとともに、朝鮮人の考えを内地人に伝えるための朝鮮思想通信社を作り、物心がついてからほとんどすべての人生を朝鮮で活動した人物であったといえる。

3．伊藤韓堂（卯三郎）と朝鮮語

3.1　伊藤に対する従来の評価

まず、これまでの伊藤に対する評価を見てみる。たとえば、チョン＝ヂョンヒョン（2018: 148）では「官の側の朝鮮語教育界の権威者」、シン＝ヘス（2014: 18）では「［…］在朝日本人に朝鮮語専門家として広く認められていた人物［…］」と位置付けられている。現代でも当てはまることだが、ある業界で顕在的に活動することや、ある言語の運用能力があることによって権威者や専門家と見做されることがある。「朝鮮語に精通」[71]、「朝鮮語及び朝鮮の事情に精通せる内地人」[72]といった言及を参考にすれば、伊藤が高い朝鮮語運用能力を持っていたことは確かであろう。しかし、ある言語の運用能力をもつ者が必ずしも専門家というわけではない。また、「官の側の朝鮮語教育界」とは漠然とした表現で、論拠なくその「権威者」とは何を以っていうのか不明である。

3.2　伊藤の朝鮮語関係の著作

伊藤自身が執筆者として明記されている朝鮮語学習雑誌記事・学習書は表1・2の通りである[73]。

69）ソウル大学蔵（Y36/2/2(2)）所収。保存の形態から号数は確定できないが実見調査によれば第2回のいずれかの号に掲載されたものである。

70）植田（2010: 38）でいうように、出版の見通しの甘さもあった。

71）「国境横断旅行」『毎日申報』1919.8.15(1)＊

72）「ラヂオ　新形式の両放送」『国民新報』1940.1.21(27)

73）朝鮮語研究会が発行した、伊藤以外の執筆者の著作は植田（2010）を参照。なお、左記で未確認とした『内鮮新辞典』・『朝鮮語通信会話』はその後、存在が確認され、本論文で資料として用いた。

表１ 『朝鮮文朝鮮語講義録』・『月刊雑誌朝鮮語』・『中等朝鮮語講座』[74]の伊藤韓堂執筆記事

発行年	掲載誌 略誌名	記事名	掲載号
1924～1925	講義録	朝鮮文章講話	第１回1–2, 5–7, 9, 12
1925	講義録	助詞の比較研究	第１回8–9
1925	講義録	国文鮮訳に就いて	第１回10
1925～1926	月刊雑誌	附録警察官専用朝鮮語教範（李完応と共編）	3–12, 14–15
1925～1928	月刊雑誌	朝鮮語会話「朝鮮一週［ママ］」	1–7, 9–35
1927	講義録	朝鮮文章講話	第２回5–12
1928	講義録	朝鮮文章講話	第３回5–12
1928	月刊雑誌	朝鮮語会話「随問随答」	35–39
1931～1933	中等	最近朝鮮文範講義	1–9

表２ 伊藤韓堂の編著書

初版発行年月日 →最終版次・発行年月日	書名	典拠
1927年５月12日	朝鮮語第三種受験者必携	韓国・国立中央図書館（原物）
1928年１月１日 →16版1942年４月18日	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16版奥付（個人蔵）
1928年１月１日 →16版1942年３月15日	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	16版奥付（個人蔵）
1928年１月１日 →11版1942年１月30日	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇	11版奥付（個人蔵）
1928年１月１日 →16版1941年11月10日	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16版奥付（個人蔵）
1928年３月10日 →２版1931年２月３日	中等学校朝鮮語教科書 上巻[75]	２版奥付（個人蔵）
1929年２月20日	中等学校朝鮮語教科書 下巻	個人蔵

伊藤を朝鮮語教育界の権威者や朝鮮語専門家とするなら、表１・２を見てわかるように実は伊藤が朝鮮語について書いたものは意外と少ない[76]。その上、学習書は全て朝鮮語研究会会長の李完応との共編著になっている。

また、その内容を見るに、基本的には言語学的な朝鮮語の把握より、体験的な把握にもとづく実用上の注意点の記述、朝鮮語の学習とともに朝鮮事情を知らしめる内容・構成になっているものか、朝鮮語奨励試験対策本、あるいは学校教科書である。

74）『朝鮮文朝鮮語講義録』の第１回・第２回はソウル大学中央図書館蔵、第３回は宮城県立図書館蔵の目次から、『月刊雑誌朝鮮語』は大阪府立中央図書館蔵の目次から、『中等朝鮮語講座』は韓国・国立中央図書館蔵（デジタル）の目次からそれぞれ作成。発行年は版を重ねた場合も初版の年を示した。

75）『改訂中等学校朝鮮語教科書』は朝鮮語研究会 編となっているため除いた。

76）朝鮮語研究会 編纂となっているものに伊藤の手になるものが含まれる可能性もあるが、明示されていないためここでは除いた。また、奥付で伊藤が編輯兼発行人とされているものは編著者というよりは発行所の責任者、あるいは編集者という意味と判断して除いた。

このような事実からも、伊藤は朝鮮語普及・奨励業界とジャーナリズム界における出版社経営者兼執筆者になったと見做すのがより妥当である。ある言語の運用能力があるからといって、その人物が当該言語の専門家であるといえないことは、時代や言語を問わず当てはまることである。

3.3　伊藤にとっての朝鮮語

本節では、これまで見た人物史と著作から、実際の伊藤と朝鮮語の関係をさらに考えてみたい。

新聞記事・雑誌記事・編著書を見れば、筆の立つ人物であることがわかる。また、雑誌を使い回しして発行したものも含めて、朝鮮語研究会が発行した学習書や、朝鮮語紙の記事の抄録した内容や講義録形式を念頭に置いた『朝鮮（思想）通信』からは高い企画力があることがわかる。そして、総督府人脈とジャーナリズム界人脈を活用しながら、当時の政策・時流に乗って在朝日本人への朝鮮語普及・奨励のための朝鮮語研究会と、朝鮮人の考えを内地人に伝えるための朝鮮思想通信社とを両輪として組織・運営する出版社経営者兼執筆者として活動した。このような伊藤のふたつの活動の特徴は、日本人を対象にして人生を切り拓くアイテムとしての朝鮮語を活用したという点にある。

ところで毎日申報の同僚であり、総督府に移った中村健太郎は次のように述べている[77]。

> 私の友人に、朝鮮語の達者な人があるが、数年前国境の横断旅行を試みた。国境は馬賊が出没したり、不穏分子が出没したりする処で、朝鮮に於ける危険地帯である。或る人が、国境は物騒な処だから護身用のピストルは持つてゐるかと聞いた。すると友人は『大概あの地方に旅行する人は、護身用としてピストル又は短刀を用意するやうであるけれども、素人がそんな武器を持つてゐると、却つて自らを殺すことになるかもしれぬ。それよりも自分には、朝鮮語と云ふ有力な武器がある。自分は如何に危険な場合に出逢つても、若し朝鮮語を只の一言でも言ふだけの余裕があるならば、決して殺されるやうなことはないと信ずるから、護身用は、何にも所持せぬことにした』と。

中村は毎日申報で伊藤の同僚であったことや「国境の横断旅行」という表現などから、この「友人」は伊藤を指すと思われる。ここからは伊藤が朝鮮語をまさに「武器」すなわち必要に応じて利用するアイテムとして捉えていたことがわかる。伊藤にとってその「武器」はピストルや短刀ではなく、何らかの事情で幼くして朝鮮に渡り、たまたま身につけた朝鮮語であった。「内鮮両民族ノ隔意ナキ提携」を志し、朝鮮語研究会と朝鮮思想通信社を両輪に日本人を対象と

77）中村（1927: 63–64）。本資料は矢野謙一教授（熊本学園大学）による複写から引用した。

して朝鮮語を必要に応じ活用し、人脈を利用してジャーナリズム界と朝鮮語普及・奨励業界で、官の世界にも食い込みながら人生を切り拓いていった出版社経営者兼執筆者であったと捉えることができる。

4．おわりに

本論文では、福岡に生れた伊藤韓堂（卯三郎）が、10代半ばから何らかの形で身につけ始めた、朝鮮語を元手にしてジャーナリズム界で活躍するも、当時の政策や時流を背景に朝鮮語普及・奨励に乗り出し、持ち前の筆力と企画力に依って、朝鮮を舞台に一生を終えた出版社経営者兼執筆者であったという人物像を示した。そこでは、伊藤が朝鮮語研究会による朝鮮語普及・奨励と、朝鮮思想通信社による朝鮮人の考えの日本人への伝達を両輪とし、着脱可能なアイテムとしての朝鮮語を日本人に対して活用したということを提示した。

ここで伊藤が詠んだ短歌を見てみよう[78]。

しこくさ

韓　堂

文を売りて未だ銭得ず街はずれ、酒幕のかどのすぎがてもなく
このころの飢えたるわれのこころ医す、かてはあらぬか、歌はあらぬか
芝居見つ、講談ききつ涙ぐむ、わがこの頃を母に告げまし
相悔いて別れし君を思はじと、座禅くめど忘れかねつも
古の望は失せてひたすらに、算盤はじく男となりて
かかれとて、誰が読みつらん古の、聖の教いま用もなし

ここでは伊藤が「文を売りて未だ銭得ず街はずれ、酒幕のかどのすぎがてもな」い自身、「このころの飢えたるわれ」、「古の望は失せてひたすらに、算盤はじく男」となった自身の「聖の教いま用もな」い現状を慨嘆し、涙して郷里・福岡の母を思い浮かべている。

これらが詠まれた時期は不明だが、『朝鮮文朝鮮語講義録』第2回の終了直前、『月刊雑誌朝鮮語』の23号が出た月に発行された伊藤（1927）に収められたものである。それまでに朝鮮語研究会からは前掲の使い回しの学習書『朝鮮語発音及文法』（李完応、1924年）、試験対策本の『朝鮮語第三種受験者必携』（李完応・伊藤韓堂、1927年）が発行されていた時期である。

78）伊藤卯三郎（1927: 375）。ルビは略。また、同書25頁には「国境横断旅行記（大正八年）から」というコラムとして挙げた6句の中に「あさましや、人と熊とは夜毎々々、たゞ一束のかてをあらさふ」という自己の身の上を投影したかのような句もあり、ここでの短歌と通ずるものがある。なお、伊藤にはこの他にも「三人寄れば七つの団体」・「国境横断旅行記（大正八年）から」などの小記事類がある（植田 2010: 29）ほか、未調査のものではあるが、『万姓詩譜』・『朝鮮古今人物誌』といったものも出版していたようである。

伊藤にもここでいう「古の望」があったはずだが、それが何かはわからない。またたとえ伊藤がそれについて書き残したものがあったとしてもそれが必ずしも本心であるとも限らないし、それを解釈する際には解釈者の観点が反映されるものである。

先に見たように、伊藤は始政25・30周年で功績者として2度の表彰を受けている。森川・越智（1935: 1177）には、25周年の表彰時について、「[…] 三十余年其ノ殆ド全部ヲ朝鮮操觚界ニ終始シ或ハ新聞ヲ通シ又著書ニ依リ朝鮮統治ノ為ニ尽瘁スル処尠ナカラズ功績顕著ナルモノトス」と記されている。これを文字通り理解すれば、植民地政策に積極的に貢献した人物と評価することができる。

ところで、これらの短歌が収められた伊藤（1927）の「本書の刊行について」では、自ら「実際における内鮮人の融合は、双方がよく理解し合ってからのことで、敵を知らずに戦争するやうな無謀なことでは、到底問題にならぬ。内地人にありては朝鮮統治に関する種々の議論発表され、多くの書籍さへ出版されてをるが、不思議なことには肝心の朝鮮人側の意見や批評を取り次ぐ者がをらぬ。」などと述べている。もちろん、この文の別の個所に「被統治者としての朝鮮人」ということばが見られるように、支配／被支配の構造に基づいた言説でもあり、また、「敵」というような言葉遣いからも批判されることがあるだろう。これを現代の視点から批判することはたやすいが、同書で検閲に依り削除された文章や箇所、さらには「文を売りて未だ銭得ず」、「算盤をはじく男」としての自身を「しこくさ」と表現している点などを合わせ見るに、ある人の内面は実のところはわからないという考えに立てば一面的な評価はできなかろう[79]。また、何らかの活動にはそれ相応の「看板」が必要となる。伊藤の言説に上述のような解釈の対象となる「内鮮両民族ノ隔意ナキ提携」・「内鮮人の融合」という「看板」は見られるが、その先にあると考えたであろう、彼の「古の望」の実態は明らかにしがたい。いささか乱暴であるかもしれないが、「古の望」を追い求めるための「看板」を「日韓友好」・「多文化共生」などに置き換えてみれば、「看板」の向こうに存在する、ある人の内面の実情は明らかにしがたいという点で、現代人の様々な活動にも相通ずるものがあるようである。

伊藤韓堂（卯三郎）は、一見ジャーナリズム界や朝鮮語普及・奨励業界で華々しく活躍し、朝鮮支配に積極的に関与した人物のように見える。しかしながら、本論文で見た人物史と著作からは、朝鮮・朝鮮語に関わり、培った人脈を利用し、着脱可能なアイテムである朝鮮語を手放さないまま駆使して、政策や時流を背景に為政者に食い込んでいき、より強く関わり続けた人生の結果、資金調達に汲々とし、「古の望は失せてひたすらに、算盤はじく男とな」ったことを「しこくさ」と自嘲する出版社経営者兼執筆者であったという新たな像が浮かび上がる。

何らかの契機で朝鮮語を学び、人生を切り拓くアイテムとして利用した日本人について見る

79）チョン＝ヂョンヒョン（2018: 164）は、同書と朝鮮思想通信に関して、「[…] 一貫するものは帝国に統合されなければならないローカルとしての朝鮮に対する関心と温情である。」と述べている。

と、朝鮮語から離れるか否かによって、いくつかのパターンが見られる[80]。たとえば、普通学校教員として勤める中で朝鮮語を身につけ、朝鮮で学校長を務め、朝鮮で死去した笹山章、東京外国語学校で朝鮮語を身につけ、総督府官吏を務めるうちに敗戦を迎えた奥山仙三は、朝鮮語から離れることはなかった人々である。彼らや伊藤とは逆に、ジャーナリズム界や教育界で活躍しながらも、日本に帰って観光プロデューサーとして全く朝鮮と関わらない後半生を送った薬師寺知曨、東京外国語学校で朝鮮語を身につけ、京城医学専門学校教授（朝鮮語）となるも、高等文官試験合格を期に実業学校長に転身したが敗戦直前に引き揚げ、朝鮮での経歴の片鱗も見せずに郷里で教育界の名士として晩年を送った山本正誠は着脱可能なアイテムである朝鮮語をさっぱりと手放した人々である。そして新聞記者から出版社経営者兼執筆者となった伊藤は、「古の望」を追い求め、実現するために、日本人を対象にして人生を切り拓く着脱可能なアイテムである朝鮮語を手放さずに活用し、在朝日本人への朝鮮語普及・奨励と朝鮮人の考えの日本人への伝達を両輪として活動した。そして、算盤をはじく「しこくさ」と自嘲もした54年の生涯の7割以上、物心ついてからほぼすべての人生を送った朝鮮の地で、植民地朝鮮社会の終焉を見る前に世を去ったのであった。

参考文献[81]

イ＝ユンヂ（2018）「伊藤韓堂」高麗大学校グローバル日本研究院在朝日本人情報辞典編纂委員会『開化期・日帝強占期（1876～1945）在朝日本人情報辞典』宝庫社＊

伊藤卯三郎 発行兼編輯人（1927）『朝鮮及朝鮮民族 第一集』朝鮮思想通信社

稲葉継雄（1997）『旧韓末「日語学校」の研究』九州大学出版会

植田晃次（2009）「「講義録」という形態から見た『朝鮮文朝鮮語講義録』の異本とその生成過程」『延辺大学学報（社会科学版）』42 増刊、延辺大学学報編集部（植田晃次 編（2011）『学習書を通してみる近代日本における朝鮮語教育史』植田晃次に再録）

植田晃次（2010）「朝鮮語研究会（李完応会長・伊藤韓堂主幹）の活動と民間団体としての性格」『言語文化研究』36、大阪大学言語文化研究科

植田晃次（2011）「薬師寺知曨」『言語文化研究』37、大阪大学言語文化研究科

植田晃次（2012）「明治期朝鮮語学習書・伊藤伊吉『独学韓語大成 全』の書誌学的研究」李東哲 他『日本語言文化研究』2（下）、延辺大学出版社

植田晃次（2014）「金島苔水とその著書」、李東哲 他『日本語言文化研究』3（上）、延辺大学出版社

80）植田（2011, 2016, 2017, 2018）

81）注3の通り、朝鮮語文献には「＊」を付す。原文復元の便宜から、直訳や「日帝強占期」など日本語として馴染まない漢字の置き換えで訳を行った場合がある。便宜上、漢字表記の朝鮮名は日本漢字音により配列する。

植田晃次（2016）「奥山仙三と朝鮮語」、李東哲 他『日本語言文化研究』4（上）、延辺大学出版社

植田晃次（2017）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た山本正誠と朝鮮語」『言語文化研究』43、大阪大学言語文化研究科

植田晃次（2018）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た笹山章と朝鮮語」李東哲 他『日本語言文化研究』5（下）、延辺大学出版社

オ＝セネ（2012）「1920年代日本人対象朝鮮語会話書のソウル地域語に対する社会言語学的接近」『ソウル学研究』49、ソウル市立大学校ソウル学研究所＊

オ＝セネ（2013）「日帝強占期日本人警察、官吏対象朝鮮語教育の歴史的背景と『警察官専用朝鮮語教範』の内容分析」『語文論叢』54、中央語文学会＊

オ＝セネ（2016）「日帝強占期日本人対象朝鮮語教育に従事した朝鮮人教育者たちの足跡についての国語学史的研究」『ウリ語文研究』55、ウリ語文学会＊

金泰賢（2011: 43）「朝鮮における在留日本人社会と日本人経営新聞」神戸大学博士学位論文

呉大煥（2009a）「植民地時期日本人のための朝鮮語教育研究」延世大学校博士学位論文（審査委員長：徐尚揆、審査委員：金河守・カン＝ヒョヌァ・カン＝スンヘ・チョ＝ハンノク）

呉大煥（2009b）「『朝鮮文朝鮮語講義録』の発音法に関する二つの記事の内容分析」『総合政策論叢』17、島根県立大学総合政策学会

呉大煥（2010）「植民地時期の朝鮮語と日本語の文法対照を通した朝鮮語教育に関する研究」『韓国語教育』21（3）、国際韓国語教育学会＊

呉大煥（2011a）「朝鮮語研究会の教育活動と教育内容及び隠れた教育目標」『北東アジア研究』20、島根県立大学北東アジア地域研究センター

呉大煥（2011b）「『朝鮮文朝鮮語講義録』の教育内容に関する検討」『言語事実と観点』27、延世大学校言語情報研究院＊

シン＝ヘス（2014）「『婦人界』第2号」（女性雑誌影印本解題）『雅丹文庫未公開資料叢書2014_19』ソミョン出版社＊

高橋猛（1939; 1939[2]）『昭和十五年度　朝鮮人名録（朝鮮年鑑附録）』合資会社京城日報社

チョン＝ヂョンヒョン（2018）「植民地の声」『韓国学研究』48、仁荷大学校韓国学研究所＊

鄭晋錫（2005）『言論朝鮮総督府』コミュニケーションブックス＊

中村健太郎（1927）『理解と同情』中村健太郎

藤原喜蔵（1926）「第三種試験と朝鮮語講義録」『月刊雑誌朝鮮語』6、朝鮮語研究会（大阪府立中央図書館蔵）

ホ＝ヂェヨン（2004）「日帝強占期朝鮮語奨励政策と京城府朝鮮語研究会」『朝鮮文朝鮮語講義録　下』亦楽＊

前田力（1926）『鎮南浦府史』鎮南浦府史発行所（標題紙による。奥付では鎮南浦史発行所）

森川清人・越智兵一（1935）『朝鮮総督府始政二十五周年記念表彰者名鑑』朝鮮総督府始政二十五周年記念表彰者名鑑刊行会〔芳賀登・杉本つとむ・森睦彦（2001）『日本人物情報大系』79、皓星社〕

山田寛人（2004）『植民地朝鮮における朝鮮語奨励政策』不二出版

山田寛人（2007a）「戦前の学習書の概要」植田晃次 編『研究成果報告書　日本近現代朝鮮語教育史』植田晃次

山田寛人（2007b）「朝鮮語研究会の活動」植田晃次 編『研究成果報告書　日本近現代朝鮮語教育史』植田晃次

山田寛人（2009）「『朝鮮文朝鮮語講義録』発行の背景」『北東アジア研究』17、島根県立大学北東アジア地域研究センター

吉本一（2012）「朝鮮語研究会の講義録と月刊雑誌について」『異文化交流』12、東海大学外国語教育センター異文化交流研究会

付記：

- 本論文はJSPS科研費JP18K00782の助成を受けたものである。また、JP17320085・JP20320081・JP23520671・JP26370726による知見も含む。一連の研究過程で共同研究者・矢野謙一教授（熊本学園大学）から多くの示唆を賜った。
- 現在では不適切とされる語句も歴史的経緯から当時の表現を用いた場合がある。
- 資料閲覧での関係諸機関のご配慮をいただいた。また、査読者お二方から有益なコメントをいただき、それを反映させた部分がある。あわせて感謝申し上げます。

伊藤韓堂（卯三郎）年譜

年月	年齢[82]	伊藤の出来事	社会の出来事
1889/M22	0	出生、原籍福岡市薬院出口	
1894/M27.7	5		日清戦争開始
1903/M36か 1905/M38	14か16	朝鮮に渡り、鎮南浦は保英学校で朝鮮語を学ぶ	
1904/M37.2	15		日露戦争開始
1905/M38.11	16		日韓保護条約
1910/M43.4	21	鎮南浦新聞社入社	
1910/M43.8	21		韓国併合
1912/T1	23	「一身上ノ事情」で退社	
1914/T3	25		第1次世界大戦開始
1915/T4.2	26	朝鮮新聞社入社	
1919/T8.3	30		三一運動

82）誕生月日不詳のため、事柄の日付にかかわらず、年を越すごとに1歳加えた。

1919/T8.3	30	京城日報社に転ずる	
1919/T8.8	30	国境横断旅行に出発（～11月帰還）	
1919/T8.9	30	「国境横断旅行」連載（～T9.2）	
1921/T10	32		朝鮮語奨励試験開始
1921/T8.3	32	毎日申報編輯局代理視務	
1921/T10.4	32	毎日申報社に入社	
1923/T12.2?	34	女性雑誌『婦人界』を創刊	
1924/T13	35		朝鮮奨励規程改正
1924/T13.7	35	毎日申報社退社	
1924/T13	35	朝鮮語研究会を設立	
1924/T13.9	35	『朝鮮文朝鮮語講義録』第1回1号発行（～1925/T14.9）	
1925/T14.10	36	『月刊雑誌朝鮮語』1号発行（～1929/S4.1）	
1926/T15.4	37	朝鮮思想通信社を設立	
1926/T15.5	37	『朝鮮思想通信』第1号発行	
1926/T15.10	37	『朝鮮文朝鮮語講義録』第2回1号発行（～1927/S2.9）	
1927/S2.5	38	『朝鮮語第三種受験者必携』初版発行（李完応との共著）	
1927/S2.8	38	『朝鮮及朝鮮民族 第一輯』発行	
1927/S2.10	38	『朝鮮文朝鮮語講義録』第3回1号発行（～1928/S3.9）	
1928/S3	39		朝鮮語奨励規程改正
1928/S3.1	39	『一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書』上篇・中篇・下篇・附録初版発行（李完応との共著）	
1928/S3.3	39	『中等学校朝鮮語教科書』上巻初版発行（李完応との共著）	
1929/S4.2	40	『中等学校朝鮮語教科書』下巻初版発行（李完応との共著）	
1929/S4.11	40	朝鮮通信社、『朝鮮通信』に改称	
1930/S5.1?	41	父死去、帰郷	
1931/S6	42		朝鮮語奨励規程改正
1931/S6.5	42	朝鮮語研究会・朝鮮通信社事務所移転	
1931/S6.6	42	『中等朝鮮語講座』1号発行（～1933/S8.11）	
1935/S10	46	始政25周年に際し表彰	
1937/S12	48		朝鮮語奨励規程改正
1940/S15.2	51	京城中央第2放送「朝鮮の今昔を語る」に出演	
1940/S15	51	始政30周年に際し表彰	
1941/S16	52		太平洋戦争開始
1943/S18.3	54	入院	
1943/S18.4	54	京城太平通1-29の自宅で食道癌により死去（4.17）	
1943/S18.4	－	朝鮮通信廃刊？	
1943/S18.7	－	郷里・福岡で本葬（7.24）	
1944/S19.4	－	朝鮮語研究会、崔常寿により「再出発」	

追記：本稿脱稿後、「国境横断旅行」が毎日申報に2日先立つ1919（大正8）年9月9日付から京城日報に日本語で連載されていることが判明した。最終回は翌年1月31日付に掲載と見られるが、影印本（韓国教会史文献研究院版）に欠いており確認し得ていない。